



学校だより

平成 30 年 9 月 28 日
横浜市立高田小学校**10 月号**

伸びよう 豊かに たくましく～学ぶ喜びにあふれた学校をめざして～

公共心・公德心

副校長 山谷 浩司

酷暑という言葉がしっくりくる今年の夏でしたが、9月の半ば頃から爽やかな風がたかたの丘を駆け抜け、少しずつ秋の気配を感じるようになりました。これから、「スポーツの秋」、「読書の秋」、「芸術の秋」、「食欲の秋」と、秋本番を迎えます。

7月16日にファイナルを迎えたFIFAワールドカップは、フランスの優勝で幕を閉じました。日本代表は決勝トーナメントまで駒を進め、強豪ベルギー代表を相手に前線からのプレッシングと、統制のとれたハードワークを機能させて優位に試合を進めましたが、終了間際の高速カウンターによって失点し、目標としていたベスト8まであと一步のところで敗退しました。優勝候補と互角に渡り合った代表選手もさることながら、観客席のゴミを自主的に拾い、会場をきれいにして帰った日本のサポーターの行動もメディアの目に留まり、賞賛されました。随所に見られたフェアプレーやサポーターの公共心、公德心は、見る人の共感を呼び、しっかりと観衆の心を捉えました。

9月最初の土曜日。久しぶりに横浜を訪れた高校時代の友人と会食するため、日本大通り駅から待ち合わせ場所に向かって歩いていた時のことです。山下公園の前の通りに出ると、一人の男性がしゃがんだ状態で作業をしている姿が目に入りました。さらに近づくと、薄い金属板のようなものを使って、歩道にへばり付いたガムを一生懸命取り除いていることが分かりました。通り過ぎる際、男性のそばにあったレジ袋に目を落とすと、たばこの吸い殻や紙屑でいっぱいになっていました。その光景を目の当たりにした私は、心の底から感謝の気持ちを抱くとともに、清々しい気分になりました。男性の行動は、義務感に迫られてのものとも、報酬や見返りを期待してのものとも映りませんでした。自らの信念に基づき、黙々と作業をされているようでした。推測の域を出ませんが、「一つゴミを片づけることで一つ街がきれいになる」といった思いを抱きながら、作業に没頭されていたのかもしれない。

遠足や社会科見学など校外でお弁当を食べた後、グループごとにゴミを拾うようにしていますが、「これは、私のゴミではありません」と、ゴミを拾おうとしない場面に遭遇したことがありました。子どもたちがゴミを拾う判断基準は、自分が出したゴミか否かという点にあったようです。「自分たちが使った場所だから、ゴミを拾う」というマナーの観点からではなく、「みんなが利用する場所だから、きれいにする」といった公共心、公德心に基づいた習慣が根付いていれば、全く別の行動になったことでしょう。この状況を改善するには、美化活動の意義を理解させるとともに、公共心、公德心につなげるための価値づけが必要だと感じました。様々な立場の人が利用したり過ごしたりする公共の場での過ごし方を日頃から意識させていくことや、どのような行動をとればより多くの人が気持ちよく過ごせるかといったことを生活場面の中で問いかけていくなど、大人からの意図した働きかけが、子どもたちの公共心、公德心の芽を育む上で必要になってくると考えます。

これから12月にかけて、生活科見学や社会科見学など、校外で学習したり活動したりする機会が増えてきます。学校とは異なる公共の場に於いて、公共心・公德心を伴った行動や態度を示していくことは簡単なことではありません。それだけに学校、家庭、地域を問わず、大人が責任をもって子どもと関わり、遠慮なく働きかけることのできる地域社会の存在がこれまで以上に重要になってきます。子どもたちへの忌憚のない声かけと、変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いいたします。